

義和団時代の張之洞の帝王志向 ——宇都宮太郎日記を手がかりとして——

(ハーバード大学) 孔 祥吉
(中央研究院近代史研究所) 馮 青 訳

[要旨]

本稿は、宇都宮太郎の明治33年（1900年）の日記を中心とした日・中の資料に基づき、義和団時代の政治的激動の中での張之洞の動向を分析し、彼に独立、帝王志向と解釈できる動きがあることを論じるものである。八ヶ国連合軍の進攻、西太后、光緒帝の首都脱出という清朝統治の危機的状況の下、短期間ながら張之洞は清朝からの独立、帝王化を志向したようで、そのことは張の腹心の日本側への談話、軍事視察団の対日派遣、軍事力拡充、自立軍の利用などの動きから読みとることができる。だが、八ヶ国連合軍の北京占領後、講和が成立し清朝の存続が明白になると、張之洞はそのような考えを直ちに断念したのであった。

中国には、「猫や虎を描くことができても、その骨までは描けない。また人の顔を知ることはできるが、心を知ることはできない」という諺がある。同じように歴史上の人物の内心の考えを知ることにはまことに容易ではない。深謀熟慮に富む有力地方官僚であった張之洞の内面の世界を探るのはことに難しい。

2002年春、筆者は日本女子大学で開催されたシンポジウムに参加する直前、久保田文次氏から、1900年に張之洞は皇帝になろうという考えがあったようだという重要な情報を得て、驚愕した⁽¹⁾。それは、同大学文学部が最近得た宇都宮太郎「明治三十三年当用日記」（以下、「当用日記」）に基づいている。宇都宮太郎の残した貴重な資料は宇都宮恭三氏が保存しており、そのご厚意により日本女子大学の久保田、吉良芳恵両氏が借り出したものである。筆者はその日記の僅か数日分しか見ていないが、非常に有益なものであった。というのは、これまでに数多くの張之洞の上奏文、書函及び未刊史料を読んだが、張之洞のように経験豊かで謹厳、慎重な重臣に帝王志向があることは信じがたかったからである。しかし、久保田、吉良

両氏の下さった宇都宮太郎の日記は、分量は多くはないが、文書として確かなものであり、軽々しく否認はできない。そこで、筆者は義和団時代の張之洞関係の史料を種々探索し、張が独立して帝王となろうとした内面について探求を試みた次第である。

I. 宇都宮太郎日記に書き残された絶好の機会

宇都宮太郎は日本の参謀本部が中国長江流域に派遣した軍事情報人員である。光緒23年（1897年）末、彼は湖北を訪ねて張之洞に会い、日中連合について協議した。『張文襄公年譜』光緒23年11月の項には、以下のように記載されている。

十七日、省〔武昌〕を出て京山唐心口の堤防工事を勘査し、二十八日に戻る。この間、日本の軍人神尾光臣が来たが、公は省会を出たところなので、海関道と知府の錢恂に命じて、神尾の接待に当たらせた。神尾は内密に日中修好の意を示した。当時、ロシアは大連、旅順、ドイツは膠州湾を占領し、イギリスは長江の利権を独占しようとし、各国の軍艦は港に集結してい

た。日本はこの情勢をおそれて、使者を遣わしたものである。神尾に続き、日本はまた参謀部員宇都宮太郎を派遣し、中国に英日と通好し、日本に学生を派遣して陸軍を学ばせることを勧めるよう、政府の命を受けたと内密に語った。日本への学生派遣はこれに由来する⁽²⁾。

張之洞は総理衙門へ送った電報の中でも、こう言っている。

総理衙門へ。日本参謀部の宇都宮は今晚また密かに、実は今回、自分は内旨を奉じて連合について秘密に協議するために来たと語った。その語はたいへん切実である。また彼は、我が国がイギリスと連合するよう勧め、連英する利と連英しない害を指摘し、なかなかのものである。その語気より察するに、日本はイギリスの陰謀はすべて承知のようである。今朝の両電奏はすでに上達されたと思うが、斟酌して機を見て対応できるよう、対処方針の諭旨を下されるよう伏して請うものである。代奏を請う。蒸。亥〔十日夜十時過ぎ〕⁽³⁾。

以上から、宇都宮太郎が当時担っていた使命が非常に重要なものであったことは明らかである⁽⁴⁾。

義和団時期、宇都宮太郎は東京の参謀本部に返っていた。久保田氏提供の日記は僅か数日であるが、その内容はきわめて重要である。当時中国国内では義和団運動が盛んになっており、八ヶ国連合軍はすでに大沽炮台を攻略し、天津を占領し、北京に向かって進んでいた。日本は八ヶ国連合軍の中でも最大の兵力を派遣していた。宇都宮太郎の明治33年（1900年）「当用日記」の関係箇所の記述は、以下の通りである。

六月二十八日 天気 晴

二十七日午後芝罘発（大沽発ハ二十六日ナル

ヘシ）ヲ似^{ママ}テ福島少将ヨリ天津大沽間ノ連絡ハ今^{ママ}ニ不確実。我兵ハ兵力ヲ纏^{ママ}メテ前進セントスル旨ノ電報至ル。大沽天津間連絡通シタリトノ廿六日着ノ報ハ取消サレタリ。此夜仲ノ町ニテ錢恂ト会シ平岩ノ通訳ニテ時事談ヲ為シタル一節ニ張等ハ天子蒙塵多分長安ニスルコトモアラハ清国ハ無政府ト為ルヘク其際ニハ南部二三ノ総督ハ連合シテ南京ニ一政府ヲ立ツルノ止ヲ得サルニ至リシ云々ノ語アリ。此夜ハ赤坂ニ泊ス。

六月二十九日 天気 晴

北京ニ赴援シ途中ニテ支ヘラレ居リタル英国海軍中将「セーモア」ノ率ユル連合軍（二千〇四十）ハ各国公使ト共ニ二十五日天津ニ入りタル旨東郷司令官ヨリ来電。伊瀬知中将ニ返電ス。蘇州玄二郎ヨリ書信アリ無事。

七月一日 天気 晴

今日ハ日曜日ナレドモ清国事件ノ為メ出勤ス。先着ノ歩兵一大隊ヲ二十九日天津ニ送ル旨ノ電報ニ接ス。公使ノ所在今ニ不明。……福島少将ノ留守宅ヲ見舞フ無事。西樞吉来訪。二十九日ノ公使天津帰着ノ報ハ頗フル疑ハシ。我第五師団ハ目下動員中。

七月二日 天気 晴

張之洞ヨリ派遣ノ武官二十九名ノ内十二名ハ先日発途帰国セシカ残り十七名モ来ル四日帰国ノ事ト為リシ張ヨリ電報来リシナリ為メ本日午後五時ヨリ偕行社ニテ大山総長ノ名ヲ以テ寺内中将代理トシテ右十七名並ニ清国公使李盛鐸、張之洞長子張樞、其子張琨、学生監督錢恂等ヲ招待シ之レニ出席ス。此途柴中佐留守宅ヲ訪ヒ公使以下柴等ノ消息ハ今ニ不確実ナル旨ヲ伝ヘテ慰籍ス。

七月五日 天気 曇

永田虎之助役所ニ来訪。此夜ハ仲ノ町ニ泊叔母上久振ニテツツ木ニ散歩。

七月六日 天気 曇

錢恂役所ニ来訪張之洞ヨリ新政府設立ノ場合アルヤモ知レス。目下兵力ヲ厚フシ置クコトハ何ヨリノ急務ニ付キ呉元愷ノ二千、張彪ノ二千五百ノ外更ニ三千ヲ募集シ度キニ付キ大尉二人ト小銃三十年式或ハ村田連発五千挺ヲ所望ストノコトヲ語ル。大尉ノ件ハ從來談ノアリタル二人ナルヤ、此二人ノ外更ニ二人ヲ要スルモノナルヤヲ反問セシニ、不分明ニ付キ此コト並ニ兵科ヲ問合ハスヘキコトヲ語ケ、小銃ノコトハ過般来張彪ヨリモ談アリタルコトニ付キ成否ハ知レサレトモ次長ヘ謀ルヘキヲ約ス。天津ニテ太田八十馬、小南良知等戦死ノ報至ル。帰途奈良原忍ノ留守宅ヲ見舞フ。[……]⁽⁵⁾

ここに引いた宇都宮太郎「当用日記」は、日本の史学界において近年最も重要な中国近代史関係の資料の発見というべきものである。なぜなら、光緒23年（1897年）以来、宇都宮太郎は長期にわたり中国の南北各省で多くの重要な活動を行っていたからである。張之洞のほか、彼は両江総督劉坤一、閩浙総督許应騫など多くの有力地方官僚と接触していたので、その日記は中国近代史と特に関係深いのである。

とりわけ明治32年（1899年）6月末から7月初めにかけての日記は重要であり、張之洞が内心、確かに独立して帝王となろうと考えていたことを示している。例えば、6月28日の記述では、錢恂の口から驚くべき言葉がでた。「張等ハ天子蒙塵多分長安ニスルコトモアラハ清国ハ無政府ト為ルヘク其際ニハ南部二三ノ総督ハ連合シテ南京ニ一政府ヲ立ツルノ止ヲ得サルニ至リシ」、と。明らかに、新たな政府を設立しようという考えは張之洞が自らの口で腹心の部下に伝えたのであり、決して電報や書信を通じて伝えたものではない。

当時、劉坤一ら東南の総督、巡撫らはただ東南互保を図っただけで、それは新政府の樹立とは全く異なっていた。南方の督撫のうち、新たな政府

を成立させて帝王となろうとしたのは、ただ両広総督李鴻章が秘密に両広独立を謀ったのと湖広総督張之洞が湖北で独立しようとした例だけであるが、張之洞はこの面において李鴻章よりもずっと進んでいたのである。

宇都宮太郎の7月6日の日記によると、張之洞はさらに日本が軍事専門家を派遣して軍事を指導することを望み、同時に武器を購入し、新式軍隊の訓練を強化しようと図り、その樹立する新政府の武力的後ろ盾にしようとしていた。さらに、錢恂は張之洞の意に基づき、宇都宮太郎ら日本軍側と秘密に連絡を取りに来たのである。

もっとも、引用した7月2日の日記には小さな誤りもある。即ち、張厚琨の名前を張琨と誤記している。日本外務省文書によると、張厚琨は従者と共に明治32（1899）年1月20日に来日している。兵庫県知事の報告によれば、「張厚琨、直隸籍。制台〔張之洞総督〕の長孫。従者には周樹林、蔣漢堂、袁舛及び王福の四名あり」、という⁽⁶⁾。後に、彼は日本の貴族学校である学習院に入学した。

以上から、宇都宮太郎日記の発見は、義和団時期の張之洞が独立して帝王となろうと考えたという内面を探るのに、有力な証拠を提供したものと考えられる。皇帝権力を頂点とする封建社会においては、臣下はただ恭しく皇権の元に跪くことができるだけであり、離反して皇権を奪い取るような分不相応な考えは、断じて許されなかった。張之洞のこの独立して新政府を樹立しようという考えは、西太后に対しても光緒帝に対しても全く大逆無道の行いであった。従って、張之洞のこのような内心の考えは口にするわけにはいかないものであり、いかにしてもこれを公けにはできない。しかし、この宇都宮太郎日記の発見により、義和団時期の張之洞の内面についてはいっそうの検討が必要になったのである。

Ⅱ. 日本側文書における重要な記述

義和団時期の張之洞の置かれた立場は、両広総督李鴻章とは異なる。李鴻章は革命派と共に両広独立の考えをひそかに有していたが、清朝朝廷から北上して講和を司るようにとの上諭が頒布されると、北上せざるをえなかった。他方、張之洞の湖広地域での地位はかなり強固であり、北方において義和団運動が激烈であった際にも、彼は種々の方法を講じて兵力を増強し、戦いに備えていた。その目的は、一つは賊軍討伐であり、もう一つは外国の侵犯に抵抗することであった。しかし、さらにもう一つの秘密の目的があった。それは私的な武力を拡充し、独立して帝王となった時の武力の後ろ盾とすることであった。

宇都宮太郎日記は、1900年に張樞が東京に現われたことに言及しているが、これは非常に重要な手がかりである。これをもとに、私は日本外務省文書の中で関係する資料を見つけた。

外務省文書によると、軍勢力拡充のため、張之洞は1900年の春夏の頃に、長男の張樞に部下の総兵呉元愷及び遊撃張彪、紀堪榮らの重要な将官を率いて日本に赴き、軍事の考察と武器購入、日本側との密接な連絡を命じた。上海総領事代理小田切万寿之助は、以下のように報告している。

公信第壹百二十七号

張樞及び湖北省武官の本邦軍事視察訪問及び湖北留学生の日本向け出発に関して

外務大臣子爵青木周蔵殿

張之洞総督の子張樞は湖北省武官（附属名簿参照）を率いて、本邦軍事視察と遊歴を行わんとし、本日博愛丸に乗りて出発せり。同時に留学生十五名も錢、徐兩監督委員の帶領の下、本邦を訪ね留学及び視察せんとて、本日共に出発せり。

張樞に本邦への感想を尋ねるに、張氏は非常

に喜ばしいと答へり。張樞の此行は湖北地方の今後の発展に頗る影響有らん。張氏一行は神戸に上陸し、その後横浜より上京せん。以上、ご報告す。

明治33年 5月12日、在上海総領事代理小田切万寿之助⁽⁷⁾

小田切の報告には、今回の訪日の代表团名簿が1枚付されているが、この名簿はきわめて重要な文献であるといえる。以下引用する。

第壹百二十七号公函附録

戸部主事 張樞 張総督之子。

湖北派出武官

総兵 呉元愷、

遊撃 張彪、

同 紀堪榮、

同 劉水金、

都司 王恩平、

県丞 白寿銘。

このほか、下記のものあり

哨官武備学生 嚴寿民

同 艾忠琦

同 戴任。

湖北派遣留学生監督及び留学生

知府 錢恂、

知県委員 徐元瀛、

学生 馬肇禎、

同 盧定遠、

同 劉修鑑、

同 姚恭寅、

同 董鴻禕、

同 沈翔云。

以上は長期留学生なり

学生 陳向威、

同 李熙、

同 盧弼、

同 尹集馨,

同 黄軫,

以上は短期留学生なり⁽⁸⁾

これは非常に重要な名簿である。ここから、今回の日本視察の主たる目的が軍事と関わっていたことが見いだせる。また、訪日の軍人はほとんどが張之洞の軍隊の中核的な人物からなっていた。

もちろん、軍人以外にも張之洞は若干の留学生を派遣している。特に注意すべきなのは、今回派遣された短期留学生の中に黄軫という人物が入っていることである。黄軫とは黄興の元々の名前である。

これまで多くの著作は、黄興の最初の訪日は光緒28年(1902年)としていた。というのは、黄興が日本の宏文書院の速成師範班に推薦されたのが光緒28年のことだったからである⁽⁹⁾。しかし、上述の小田切の報告から、早くも光緒26年4月14日(1900年5月12日)に、黄興は張樞に随って短期間日本に派遣され、軍事を学んでいたことが確認できる。

張樞の日本派遣の日時はとても敏感な時期である。当時の北京は非常に混乱しており、義和団兵士が町中におり、列強の公使は公使館地区への軍隊集結を協議していた。張樞の訪日期间、張之洞は絶えず電報を送って連絡を取っていた。その主要なものを以下に掲げる。

東京錢念劬宛 密 吳鎮(総兵吳元愷)、張遊撃(遊撃張彪)と共覧のこと

筱〔17日〕電到着と思う。都の状況は判りがたく、総理衙門も交代となり、大局は予測し難い。日本の書記官は董軍に殺されたが、中日開戦となれば、どうなるか。湖北省は兵2000を増強する予定である。吳鎮、張遊撃らはすでにあらかた軍隊を視察したか。現時の日本側の応対、語気は如何か。さらに日本から大尉2名を募集

するのは支障ないか。速かに共同で協議し、返電されたし。被服、炊事用品など2000人分の購入を考えているが、迅速にできるか。あるいは内地で調達可か。あわせて検討の上、督署へ返電されたし。效〔19日〕。二十六年五月十九日辰刻。

東京錢念劬宛

至急。湖北では兵員の増強、訓練を大変急いでいる。吳鎮、張遊撃は速やかに帰国し、武器、物品の購入については錢守に任せ、もし既に入手なら直ちに持ち帰るべし。湖北督署。号〔20日〕二、光緒二十六年五月二十日亥刻。

養〔22日〕電了解。15日李鴻章に急いで上京の電詔あり。上意はすでに剛・董〔剛毅と董福祥〕の誤りを悟り、開戦の非を悔んでいるのだろう。日本側はこの詔を聞いてどう論じているか。貴方は目下どのような対応策があると考えるか。速かに報ぜよ。董軍は国に禍をもたらし、罪は深く誅しても足りない。最近、大沽炮台ですでに開戦と聞が、問い合わせができない。光緒二十六年五月二十二日亥刻。

東京錢念劬宛

漾電〔23日〕了解。大沽は20日に確かに陥落し、露、日の大軍がまず上陸した。すでに李鴻章が電報で召されたので、宮中の意向は講和を願っているはずだ。閣下は速やかに秘密裏に外務省と協議し、各国が中華を併せんとすることは日本にとって最も不利だと指摘されたい。剛・董と義和団が戦いを始めたのはもとより上意ではなく、もし〔列国の〕挙動が過激ならば、京城は潰え、皇位は危殆に瀕し、京城周辺各省は同時に大混乱に陥り、西洋諸国は九割の利を得るも、日本は一割しか得られず、なお窮まる。今回は日本の兵が最大なので、必ずや列国の議

論を取りまとめられるはずである。もし日本が局面を維持し、条約締結を延ばし得たならば、今後、中華は日本の徳に感じ、必ずや事ごとに日本側と連絡を取ることであり、だれからも阻まれない。これぞ、日本にとって無窮の利となるだろう。東半球の利害の要はこの数日にある。日本側に熟慮して慎重に前途に処するよう努めて勤めよ。このような趣旨で如何か。至急返電を望む。李鴻章は日本人と深く協議できるか。この電はみな正々堂々たる言辞だが、私が李鴻章に日本側との協議を託すのは有益か。至急返電を待ち、決せん。壺、漾〔23日〕。光緒二十六年五月二十三日辰刻発。

東京錢念劬宛

村田式銃の口径はいくつか。同銃に各弾丸千発を配すると価格はどうか。金額が大きすぎた場合、分割支払いは可能か。〔……〕もし分割可能なら多めに購入せよ。至急返答されたい。賊軍討伐には武器が必須であり、必ず我に売却するよう協議し、決して翻意されないように。さらに屢々続電し、決めよう。

私は両江総督劉坤一、両広総督李鴻章、江蘇巡撫鹿傳霖、安徽巡撫王之春及び欽差大臣李秉衡とともに数回にわたり電奏し、賊軍討伐を力請した。また巡撫袁世凱も屢次剿匪を電奏した。もし李公使が勅命により撤収するのでなければ、貴兄らは帰国の必要はないだろう。至急返電されたい。光緒二十六年五月廿三日、亥。

至急 東京錢念劬、並びに呉鎮、張遊撃宛

漾〔23日〕両電了解。ご提案の劉、袁、栄と連合して賊軍討伐をするには、いかなる方法があるか。賊軍討伐はもちろん深く願うが、ただ栄禄の軍隊には勧説に努めることができるが、南方の軍隊はどうやって遠く北方に行くのか。鄂東〔湖北東部〕はみな賊軍討伐を望んでおり、

至急詳細を明らかにされたい。貴兄らの経費はどれだけ必要か。速やかに返電せよ。即時送金する。事態急迫、費用不足のため、武器購入を先にし、衣服は後に回すほかない。村田式銃は使用できるか、値段はどうか。至急返答されたい。もし、同銃がまだ使え、かつ運送可能ならば、急いで大量に買い付けるべきであり、もちろん急いで送金する。また、武器弾薬の製造代行は問題ないか。いずれも至急返答を請う。光緒二十六年五月二十三日、戌⁹⁰。

以上、引用した電報の受取人錢念劬は、字は念劬、原籍は浙江省呉興。呉鎮は総兵の呉元愷、張遊撃は張彪のことである。

明らかに、張之洞が朝廷に背いて長男の率いる軍事代表団を日本に派遣し、視察させたのは尋常の行動ではなく、全く張の私的意向に従ったものであった。錢念劬が宇都宮太郎に、張之洞の新政府樹立の意向を述べたときには、張権はすでに在京1か月余りであり、このような重大な問題は、明らかに張権らと子細に協議した上で正式に日本側に出したものと思われる。宇都宮太郎の6月28日の日記には、「張等ハ天子蒙塵多分長安ニスルコトモアラハ清国ハ無政府ト為ルヘク其際ニハ南部二三ノ総督ハ連合シテ南京ニ一政府ヲ立ツルノ止ヲ得サルニ至リシ」と錢念劬が述べたと記されている。これは、おそらく張之洞が長男張権の武漢出發前に言った言葉と思われる。

張権の率いた軍事視察団は日本に約4か月余り滞在した。ちょうど北京で義和団が最も激烈であった期間であり、八ヶ国連合軍が天津の大沽に上陸し、そして光緒26年7月20日（1900年8月14日）には北京を攻略し、西太后は光緒帝をむりやり連れて山西に逃げ、突如、李鴻章に北京で和議を司るよう命じた。これは清代でも最も激烈、急速な政治変動の時期であったが、この間、張之洞の長男は日本の軍及び政界と連絡する使命を帯びてず

っと日本に滞在し、様々な活動をしていた。結局、状況が落ち着き、西太后がなお清朝の大権を手中に保った時になってようやく、張之洞は張樞一行の帰国を命じたのである。

長崎県知事の高秘第330号「清国人帰国に関する報告」には、こうある。

一、清国湖広総督張之洞之子、戸部主事張樞及び総督之孫張厚琨並びに随員二名は、昨午前西京丸に乗船来港せり。同日午後、元の船に乗り上海に向け出発。本港停留の間、特段の状況なし。

一、清国湖南省学生楊士輝、十九歳、横浜大同学校学生、このたび帰国の途中、先月二十九日上陸し、本市西浜町岩永方に宿泊せしが、昨日西京丸に搭乗し、上海方面に向けて出発せり。滞在中、特段の状況なし。謹んで報告す。

外務大臣青木周蔵殿

内外両相、警視総監、神奈川、兵庫、福岡県知事にも同報

明治33年9月4日 長崎県知事 服部一三⁽¹⁾

混乱が収まり、状況が安定し、独立して帝王となる考えを捨てた後、ようやく張之洞は張樞を日本から呼び戻したのである。張之洞のこの特殊な外交活動は極秘に行われた。これは、義和団時期の張之洞の内心に一瞬現れた帝王志向を示すものであることは疑いをいれない。

Ⅲ. 腹心の幕僚達の密謀

張之洞は、張樞に湖北軍人を率いて日本に派遣したのと同時に、周りの幕僚達ときわめて内密の協議、検討を行っている。その中心的な問題は、清朝最高支配者にどういう態度を取るかということであった。香港の『明報月刊』第9巻第10期に、周康燮「陳三立の梁鼎芬への密書 あとがき」が掲載されたが、その内容は極めて重要である。以下に引用する。

下に引用する。

新聞で電文を読んだが、憤慨に忠にして力を識ることはなお往年の如きを知った。今や危険は極まった。1弱国で以て8強国に対するのは、千古、万国に照らしても理も勢もないことである。もしも間隙を見出して非常の手段に出て、病症を洞察して中枢を転じず、ただ因循姑息に処するのならば、形勢は悪化し、必ずや窮境に陥り、悔んでも及ばないだろう。私の考えるところ、目下の国家、民衆の命脈はまことに劉〔坤一〕、張〔之洞〕両総督の挙動にかかっているが（原注：劉はだめだが、なお張が主唱し、劉が付和することを願う）、顧慮徘徊し、見たかと思うと直ちに去り、独り沈思し、なぜこのように考えないのだろうか。前には陶觀察の勸説、龍大令の書函により、雪澄と相談し、斟酌拡充して、賛助に努めるよう伏して願った。さらに、張が劉に迫り、以て万一の起死回生の策とすることを願っている。精衛〔鳥〕が海を埋め、杜鵑〔ホトトギス〕が血を吐くように〔困難を恐れず全力でやり遂げる〕。すべて本函に尽くし、もう繰り返さない。弟節庵、密函。急ぎ頓首す⁽²⁾。

この密書の中で出てくる人名は、みな義和団時期、張之洞に非常に密接であった人物である。発信者の陳三立は元湖南省巡撫の陳宝箴の息子であり、受取人の梁鼎芬は字は星海、号は節庵。龍大令は名は澤厚、字は積之、原籍は広西省臨桂で、唐才常が召集した張園国会に参加したことがある。王秉恩は字は雪澄、または息存、原籍は四川省華陽、挙人で、張之洞の腹心の幕僚であった。陶觀察は陶森甲で、字は渠林である。呉天任氏は、以上の人物の考証の他、さらに陶森甲は「当時、湖北候補道員として湖広総督を代表して上海に赴き、東南互保の協議に参加した者である」と指摘

している⁽¹³⁾。

しかし、外務省文書によると、陶森甲は両江総督劉坤一の腹心のようで、常に劉の代表として小田切・上海総領事と秘密に連絡を取っていた。また、陶森甲はしばしば両江総督衙門の秘密文書、例えば駐日公使蔡鈞から朝廷宛密書などの機密文書を小田切に渡しており、極めて活躍した謎の人物である。

この手紙の書き出しは、「新聞で電文を読んだが、憤慨に忠にして力を識ることはなお往年の如きを知った。今や危険は極まった。1 弱国で以て8 強国に対するのは、千古、万国に照らしても理も勢もないことである」、と言っている。ここから、この手紙を書いた時期は、ちょうど西太后を首領とする頑固派が八ヶ国に同時に宣戦した時であることがわかる。当時、西太后は宣戦の詔書でこう記している。

朕は今泣涕して先廟に告げ、慷慨して師徒に誓う。妥協して生存を図り、万古に辱めをもたらすより、大いに征伐を行い、一に雌雄を決するにしかず。連日群臣百官を引見し、謀を尋ねるに皆同じなり。近畿及び山東等の義兵、同日、期せずして集まる者、数十万人を下らず。下は五尺の童子に至るも、また能く干戈をとって社稷を守る⁽¹⁴⁾。

ここから、この手紙は、まさに北京の清朝朝廷内部が混乱を極めていた時に書かれたことがわかる。西太后は興奮して随意妄動を行い、八ヶ国連合軍の大攻勢に遭い、清朝政府はいまにも崩壊する可能性があった。従って、陳三立は密信の中で、「もしも間隙を見出して非常の手段に出て、病症を洞察して中枢を転じず、ただ因循姑息に処するのならば、形勢は悪化し、必ずや窮境に陥り、悔んでも及ばないだろう」、と言っていたのである。この中の「非常の手段に出」る（原文：題外作文、

度外挙事）とは、明らかに張之洞に非常な措置を取るよう勧めたものである。また、「病症を洞察して中枢を転じ」る（原文：洞其症結，転其枢紐）とは、おそらく西太后を頭とする守旧派を政権からおろし、光緒帝に交代させる、あるいは張之洞が新政府を組織することを示すものだろう。中枢（原文：枢紐）とは、牛耳を執るもののことである。

当時、劉坤一周囲の幕僚達も、「皇帝の南下を迎える」等の非常手段を取って、西太后政権を実権なきものにしようと図ったが、劉坤一に断られた。従って、陳三立の梁宛密書では、「私の考えるところ、目下の国家、民衆の命脈はまことに劉〔坤一〕、張〔之洞〕両総督の挙動にかかっている（原注：劉はだめだが、なお張が主唱し、劉が付和することを願う）」と記したのである。明らかに、劉坤一はこの種の冒険行為を犯す気はないので、彼らは「中枢を転じる」希望を張之洞に託したのだった。

さらに、皮明麻氏によれば、日本の士官学校留学生傅慈祥は東京帝国大学留学生の黎科と請願団を組織して帰国した後、「前後して南京、武昌で両江総督劉坤一と湖広総督張之洞に面会し、清朝から離脱して「自立」するようにと求めたところ、張之洞は明確な態度を示さず、劉坤一は厳しく拒絶し」た⁽¹⁵⁾。

この記述は、陳三立の書函の「劉はだめだ」（原文：劉已矣）という語と一致するものであり、張之洞の帝王志向は劉坤一よりずっと強かったことを表している。

この書函から、陳三立は密謀に関わる重要人物であることがわかる。張之洞をよく理解している劉厚生は、後にこの事を回想して、ずばりこう言った。「張之洞はもとより首鼠両端を持する人物であり、自分の利益を前提とし、特定の政見は持たない。……〔従って〕陳三立らが政局転換の重責を張之洞に期待しようとしても、失敗しないは

ずはないのだ」⁽¹⁶⁾、と。

以上、清朝の最高権力の交替に関し、張之洞とその腹心の幕僚達は内々に種々の準備、画策を行っており、多くの人がこれを知っていた。しかし、当時の政治情勢が瞬く間に転変する中、張之洞は優柔不断であったため、これらの計画はみな実行できなかったのである。

IV. 自立軍に対する不即不離の態度

義和団時期の張之洞の帝王志向については、錢恂が宇都宮太郎に明言した新政府を設立したいという言葉のほか、別の証拠もある。それは、張之洞が唐才常の指導する自立軍の蜂起に対して取った不即不離で曖昧な態度である。

周知の通り、唐才常は譚嗣同の肝胆相照らす親友であり、康有為、梁啓超とも非常に密接な関係を持っていた。康有為は日本到着後、中国に関心を持つ日本人に対し、自分には湖南の好漢がおり、西太后政権に反対するための後衛部隊となり得ると繰り返し述べている⁽¹⁷⁾。また、唐才常が1900年初春に上海で設立した正気会は、明らかな反満州・親光緒帝の傾向があった。後に自立軍に改称した後、「起兵勤王」（兵を起こして皇帝に忠を尽くす）のスローガンを打ち出したこともあった。自立軍の構成は複雑で、維新派、留学生、急進的な革命党もいれば、哥老会などの秘密結社の人達も含んでいた。特に、東京から帰国した留学生のなかには、張之洞が自ら育成した両湖書院の優等生もおり、彼らは劉坤一、張之洞に無知蒙昧なる守旧的政府をうち捨てるよう説得を試みたこともある。これに対し、劉坤一は明確に反対したのに、張之洞は曖昧な態度を取った。馮自由は『中華民國開国前革命史』においてこの事を指摘し、後に張篁溪はその説に従って「自立会始末記」を編纂した。「始末記」に言う。

唐才常、林圭らの発行した富有票は哥老会の

助けを得て、湖北、湖南、安徽、江西の各府州県に大量に散布され、勢力は日に日に急成長した。林圭は好機逃すべからずと考え、唐才常に漢口へ行って速やかに蜂起を企てるよう促した。唐が漢口に着いた時、ちょうど北方では義和団事件が起こり、西太后と光緒帝が西に避難した。そこで、彼は日本人を通じて張之洞湖広総督と親交を結び、北方は無政府状態となったことを口実に、自立軍が張を擁護するので両湖に拠って独立を宣布することを婉曲に勧めた。張之洞は躊躇して決しなかったが、同時に秘密結社の活動を聞知しつつも弾圧せず、全く好意を持たないわけでもないようであった。唐才常は様々な方法を講じて張之洞の決断を促したが、張は意思を表明しなかった。唐才常は望みがないと思い、公然と言った。「もし張之洞が清廷の命を奉じて排外を行うのなら、私はまず彼を殺し、自ら外国人保護に任じよう」、と。張之洞はこれを聞いて、深く彼を恨み、革命党人に先制攻撃をかけて一網打尽とし、禍根を絶つことを決めた⁽¹⁸⁾。

馮自由〔に基づく張篁溪〕の上述の文章はこれまで広く引用されているが、必ずしも厳密ではなく、時間的にやや間違ったところがある。即ち唐才常が張之洞に勧説した時期を「西太后と光緒帝が西に避難した」後と述べているが、これは誤りで、実際は「西太后と光緒帝が西に避難」する前であった。当時の政局は混乱を極めていたので、どのようなことも発生し得たのである。

まさに張之洞がこれら西太后政権を覆そうとする「狂妄之徒」に対し、警告も弾圧もしないからこそ、唐才常らに張は「全く好意を持たないわけでもないようであった」という印象を与え、それゆえ自立軍は本部及び活動中心を武漢地域に移すことを決めたのである。自立軍はまさに張之洞の目と鼻の先で活動が続けたと言える。張之洞の放

任の態度により、湖北、湖南の軍隊の多くの指揮官、例えば威字営統領黄中浩、武功營の辜人杰らが続々と富有票を購入し、自立会に参加した。

張之洞が戦時混乱の際に自立軍の公然たる反西太后の活動を放任した理由は、彼の内心奥深くに独立して帝王となるという考えが存在していたからにほかならない。

しかし、張之洞はまたきわめて狡猾な官僚であった。彼は自立軍の公然たる反西太后の活動を放任すると同時に、また大々的に西太后を擁護し、両宮を守ると宣揚していた。彼はイギリス上海総領事宛の電報で、こう述べている。

〔……〕我が中国は孝を以て天下を治め、臣民共に両宮〔西太后・皇帝〕を擁護し、少しも異論はない。臣民が皇太后を尊敬することはまたイギリス人が自国の皇后を尊敬するのと同様であるだけでなく、また皇帝はさらに母子の恩も重ねて皇太后を尊敬している。我が皇太后に不安があれば、我が皇帝も安心できないのである。現在、東南各省は治安を保ち、詔に従い外国人を保護しようと努めている。しかし、もし各国が我が皇太后、皇帝を尊敬しないとすれば、全国の臣民は必ず不満を抱き、以後の事態は予想できない。昨日、部下を派遣して漢口の英領事とこの事を論じたが、同領事も深く憂慮し、こう言った。近年、各国の多くは上海各紙の誤報を真に受けて、中国の真の事情がそうであることを知らなかった。すでに外務省に打電して伝えた、と。彼の話しぶりは非常に誠実であった。どうか貴総領事は、この段を詳察され、康有為らの誹謗は決して中国の実情ではなく、中国臣民の公論でもないことをご理解下さり、上海、香港及び南洋各地の新聞社に対し我が皇太后誹謗の言論を厳禁し、見つけた場合は直ちに処罰されるようお願いする。また、欧文紙でもすべてこれを厳禁してほしい。我が中国の両宮への

尊敬は決して異論がないのであり、各国側も我が両宮をとともに尊敬することを望む。そうすれば、中国の人心は激発されず、各国の聞知も惑われず、戦乱の発端を抑えられるかもしれない。
〔……〕⁽¹⁹⁾

これは張之洞の公の面であるが、彼なお別の面を持っており、自立会メンバーが管轄下で盛んに活動するのを黙認していた。彼の内心奥深くにはある種の僥倖心が存在したかのようで、もしひとたび独立の機会が到来すれば、偏師をもって自己の力を強める、つまり唐才常の武力を自己の政治的夢を達成する道具に変えることができる、と期待したのである。

張之洞のこの暗い内面はなお他人には吐露していなかったと思われていたのであるが、宇都宮太郎日記の発見により、人々の疑いは遂に証明されたのである。ただ、この時期に起きた事件を並べて見れば、張之洞の意図は明瞭に見てとることができる。以下、郭廷以の『近代中国史事日誌』の記述を摘出する。

1900年8月9日（光緒二十六年七月十五日） 唐才常の自立軍に属する元統領秦力山（鼎彝）は、安徽省大通で蜂起し、大通を占領した。張之洞は通告を出し、「匪賊の頭目を討って君側の奸を除き、万国に謝する」をスローガンとした。右軍の統領蓋は湖北省新堤で挙兵した（一説には、沈の挙兵は漢口放棄失敗後）。

8月11日（七月十七日） 安徽省大通の自立軍、敗れる（秦力山は日本に逃亡）。

8月12日（七月十八日） 八ヶ国連合軍、通州を占領。

8月13日（七月十九日） 李鴻章、盛宣懷は劉坤一、張之洞らに打電し、両宮の西幸を共に諫止すべく協議しようとしたが、張は不可とした。

8月14日（七月二十日） 八ヶ国連合軍、北京入

城。

8月17日（七月二十三日） 張之洞は李鴻章に打電し、各国に北京を攻略しないように、また24時間以内に返事をするよう請求させた（まだ北京陥落を知らず）。

8月21日（七月二十七日） 両宮宣化府着。自立軍督弁の唐才常らは漢口で蜂起を謀り、情報が漏れて捕えられる（蜂起予定日は8月9日から19日、さらに23日に延期していた）。翌日、張之洞は唐才常、林圭、傅慈祥、黎科ら20人を殺し、自立軍は完全に失敗した（湖南巡撫余廉三も多くの革命党員を捕えた。前後して捕殺されたもの、汪鎔、唐才中、蔡鍾浩、方成祥、徐徳、李英、談燾、何来保ら百人余り）。

9月4日（八月六日） 張樞一行、日本から上海に戻る。

明らかに、張之洞は連合軍の炮火は西太后支配下の清朝朝廷を崩壊させなかったことを悟っていた。西太后、光緒皇帝はなお無事であり、狼狽して逃亡はしたが、なお同じように政令を発布できた。大局はすでに明らかになり、独立しようといういかなる行為も絶対不可能となった。そこで、張之洞は時機を外さず決断し、直ちに漢口駐在イギリス領事の許可を得て、租界において唐才常及びその自立軍メンバーを捕らえ、急いで殺したのである。義和団時期、張之洞がイギリス領事と密切であったことは、以下の未刊の秘密書函からその一端を知ることができる。

イギリス領事の辜委員宛返信

来函拝領、すべて了解した。昨日述べた今回の出兵はただ暴虐を除き、良民を安んずることが目的であり、必ず従来通り両宮を敬うということについては、仰るとおりソールズベリー首相に直接打電し、各国政府が速やかに中国の官民に宣布した電文内容を公布するよう請求し

た。また、「西太后の政治訓導については、張総督及び各省督撫はみな正当なものと考え、両宮の擁護については全く異論はない。また、この度の外国人迫害は実際には太后の本意ではないので、各国は太后に責任を帰すべきではない」と声明した。

さらに私は、〔英国〕政府がもし速やかに両宮の尊敬、保全の意思を表明しなければ、中国各省では必ず外国を疑い、長江一帯でも安定を維持できなくなる恐れがある、と自分の考えを切実に伝えた。改めて総督に対し、再び貴国駐英公使に電して、この趣旨を我が政府に伝達し、私の主張を助けるよう請う次第である。

端王が密かに帝位を狙っているという外界の流言について、総督はすでにその誤りをご存じとのことであるが、どうか本館の前述をお調べ頂きたい。ソールズベリー首相は総督の端王討伐を支援したいと願っている。この件の照会の返文が本館に着いており、上海駐在総領事に打電して新聞に登載させ、また本国政府にも直接電達する所存である。

また、北方戦禍の原因及び現在の立憲監督の計画の趣旨を詳しく新聞に掲載するよう総督に請いたいとお考え、まことに重要な手段と存ずる。閣下が速やかに総督の代わりに欧文原稿を起草し、上海の各欧文新聞に登載させることを望む。

また近ごろ総督は北方の事件に甚だ焦慮されているとのこと、どうぞ総督がご懸念を解き、ご安心なさるようお伝え頂きたい。かねてから張総督と南洋劉総督の声望は各国の尊重するところ、もし両公が大局に裨益する良策をお持ちならば、各国政府は必ずご相談に預かりたい。また、もし総督がソールズベリー首相にご相談したいことがあるならば、私は必ず誠心誠意援助する²⁰⁾。

上述の辜委員とは辜鴻銘のこと、当時は張之洞の幕下の洋務委員であった。この書函から、張之洞とイギリス領事との間がどんなに呼吸の合った協力関係であったかが明らかである。張之洞がイギリス領事の許可を得て、租界内で唐才常とその自立軍メンバーを逮捕したのは、決して偶然の事件ではない。

安徽省大通は湖北のすぐ近くにあり、自立軍の前統領秦力山らが8月9日に蜂起すると、張之洞はいち早くその情報を手に入れたはずであるが、彼は十数日も兵を動かさず、態度を表明しなかった。それは大局がなお明らかでなかったからである。八ヶ国連合軍の北京攻略後、西太后の政権が安泰であったことから、張之洞は8月21日によりやく唐才常に刀を向けた。彼の唐才常殺害の時期はまさしく、西太后政権が倒れなかったことを知った直後だったのだ。

その後、張之洞の自立軍に対する処置は極めて厳格であった。第一歴史檔案館所蔵の張之洞の自立軍捕殺の報告書によると、彼は根絶の態度を取ったことが明らかである⁽²¹⁾。

自立軍を残酷に弾圧すると同時に、張之洞はあらゆる方法を講じて西太后とその腹心に自己の忠誠を表明しようとした。彼は、西安の行在に厚く贈り物をしたほか、光緒26年9月5日には妹の夫鹿伝霖にこう打電した。

西安、軍機大臣鹿尚書へ

榮〔禄〕宰相は到着したか。数日前、保定の探電によれば、連合軍の保定到達後、英提督は保定の委員に榮禄と剛毅、董福祥の名をあげ、これを懲罰したいと言ったという。武衛中軍が各国公使館を攻撃したからだ。私はすでに劉峴帥〔劉坤一〕、邸相〔李鴻章〕に電報を送り、榮宰相は拳匪討伐を強く求め、開戦は欲していなかった、様々な証拠もあると努めて述べ、邸相が各国公使に弁解するように求めた。榮宰相

に会う時にはこのことをご伝達されたい。榮とは面識がないが、これは公義である。もし榮氏が私に言及した時は、どう言っているかお示し下されたい。〔……〕九月初五日⁽²²⁾。

上述の「保定の探電」とは、張之洞が保定に派遣した密偵から送ってきた情報を指している。張の書函、電文檔案を読めば、彼が北京、天津、上海など各地に密偵を配置していたことが判る。張之洞は榮禄ら高官達に自分の内心奥深き考えを見破られないかと戦々競々としていたため、この電報を送ったのである。彼は情報を収集しながら、またその妹の夫で当時すでに西安行在にいた軍機大臣鹿伝霖を通じて、満州高官の榮禄に自己の忠誠心を示したのである。

V. 結び

張之洞が独立して帝王となろうという考えを知っていた清朝官僚はごく僅かであったが、日本政府は宇都宮太郎ら軍部の報告により、張の新政府樹立の願望を知っていた。そこで、八ヶ国連合軍の北京占領後、講和が日程に上がった後に、張之洞による中国の新政府樹立の提案が出されたのである。張之洞はこれを聞くと、日本に突かれて厄介なことが起きるのを恐れて、慌ててこれを阻止した。張之洞未刊電稿の中の「至急 東京錢念劬宛」には、次のようなものがある。

来函了解。李使が急いで私を政府に推薦するとは、驚愕の極みである。もし彼が頑固に私を押し入れるのなら、きっとひどい目に遭う。どうか何としてでも阻止して頂ければ幸甚である。返信を待つ。閏八月十六日午刻⁽²³⁾。

李使とは、駐日公使李盛澤のことである。この電文の冒頭に「来函了解」といっているので、張之洞は錢恂からの密書を得た後、急いで返電した

ことを表している。李盛澤が張之洞の中央政府入りを推薦したのは、恐らく日本政府の意向により提起したと思われる。情勢観察に巧みな張之洞は、この時にはもう決して新政府の首脳に就任しようとはしなかった。

翌日、張之洞は再び錢恂に電報を送り、更に詳しくその理由を説明した。

大至急。東京錢念劬へ。

この頃、日本の国書を見るに、こうあった。「もし和平を切望するならば、公けに論旨を下し、守旧頑迷の者を用いず、内外の声望高き有為の者を選んで大臣とし、改めて新政府を樹立するべきである。陝西の西太后、皇帝は直ちに北京に戻り、友邦に罪を開いた過ちを悟ったことを実証するならば、各国は講和に応じないはずはない」、と。後の帰京して罪を認めるという部分はひとまず置いて、初めの声望高き者を選んで新政府を立てるという部分は、明らかに私を念頭に置いている。もとより朝廷は必ずしもこの通りに行わないだろうが、もしこれを許し、急に宣布したら、長江地域で必ず混乱が生じるだけでなく、大局も必ず転変し、これまでの努力が水泡と化すだろう。また拳匪はなお辺境におり、私は2度にわたり李鴻章と共に、この災禍の主犯共を攻撃した。また、他の地方大官と協力して剛、董を征討した。〔……〕必ずその害を受けるだろう。ぜひ青木君〔周蔵外相〕に対策を講じるよう頼み、また急いで伊藤〔博文〕に対し、現在、私は湖北を離れないことが最善であり、内外にも有益で、非常に重要であると婉曲にご伝達されたい。もし、北上して政治に参加すれば湖北を放棄することとなってしまう、絶対不可である。やはり湖北に留まりまた国政にも参与し得るのが最善である。返信を待つ。名心叩。効。閏八月二十日。子刻²⁴⁾。

日本の政府要人は張之洞が新しい政府を組織することを望んだが、張之洞は情勢が変化したことを感得し、独立して帝王となるという考えを完全にうち捨てたのであった。彼は新政府を組織したくないわけではないが、日本側の計画は全く実現不可能で、逆の結果をもたらすだけだと感じたが故に、慌てて「大至急」電により、その阻止に努めたのだ。張之洞の資料では「大至急」の電報は極めて稀である。

張之洞のこのような前後不一致の動きは、前述の分析を補完するものであり、これにより、義和団時期の張之洞の内面の帝王志向をより理解することができるのである。

最後に一つ述べる。義和団時期の張之洞に独立して帝王となろうという考えがあったことを指摘したのは、久保田氏が最初ではない。久保田氏は宇都宮太郎日記をご覧になった後、このように考えた。しかし、范文瀾氏は『中国近代史』上冊の中で、義和団運動の時期、政治の変転極まりない中、張之洞の新政府設立に関する態度は、密切に「情勢を観察し、もし光緒帝と西太后が共に死ぬか、あるいは西太后が先に死ぬ場合は、〔自分を〕擁護するのを受けいれ〔光緒帝の〕傀儡政府を組織することができる。もし光緒帝が先に死ぬか、あるいは光緒帝と西太后が共に存する場合は、彼らは帝政ロシアの勢力は強大であるため、清朝の統治は決して崩壊しないので、擁護を拒否することとする」²⁵⁾というものであったと分析している。張之洞は八ヶ国連合軍の北京占領後も、光緒帝と西太后が共に継続したことを知った後、「唐才常らの挙兵前に機先を制せんとし、20人余りを捕えたが、なお白日の下での処刑を取えず、二更後に辺鄙なところまで連れて行って斬首した」²⁶⁾。張之洞は深謀遠慮に富んでおり、必ずやこの手に出るのだ。范文瀾氏と久保田氏がともに張之洞の帝王志向という問題を提起されたことは、まさしく日中両国の歴史家の「英雄の所見、ほぼ同じ」

とすることができるだろう。

〔注〕

- (1) 宇都宮太郎『明治三十三年当用日記』（原本は宇都宮恭三氏所蔵，宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策——陸軍大将宇都宮太郎日記』全3巻，岩波書店，2007年——として刊行予定。）
- (2) 胡鈞重編『張文襄公年譜』北京，天華印書館，民国二十八年版，卷3。
- (3) 張之洞『張文襄公全集』，卷79，1417頁。
- (4) 孔祥吉・村田雄二郎『罕為人知的中日結盟及其他——晚清中日關係史新探』巴蜀書社，2004年，79—80頁，參照。
- (5) 宇都宮太郎『明治三十三年当用日記』。
- (6) 外務省外交史料館蔵。明治32年1月20日，兵庫縣知事より外務大臣宛報告。兵發秘第23号。〔訳者注：中文訳文より反訳，以下同様〕。
- (7) 外務省外交史料館蔵『在本邦清国留学生雜件』（学生監督並びに視察員之部）。
- (8) 同上。
- (9) 戴逸，林言椒主編『清代人物伝稿』下卷，遼寧人民出版社，1984年，第1冊，226頁。
- (10) 『張之洞未刊電稿』丙編，庚子五月二十三日去電。
- (11) 外務省外交史料館蔵『在本邦清国留学生雜件』（学生監督並びに視察員之部）。
- (12) 周康燮「跋陳三立与梁鼎芬密札」『明報月刊』（香港）第9巻第10期，ただし，吳天任『梁節庵先生年譜』台湾藝文印書館，1979年，139頁による。
- (13) 吳天任同上書，140頁。
- (14) 『義和団檔案史料』（上冊）北京，中華書局，1959年，163頁。
- (15) 皮明庥『唐才常和自立軍』湖南人民出版社，1984年，63頁。
- (16) 劉厚生『張謇伝記』上海書店，1985年，100頁。
- (17) 孔祥吉・村田雄二郎前掲書，371頁。
- (18) 『自立会史料』岳麓書社，1983年，9—10頁。
- (19) 『張之洞未刊電稿』庚子六月二十九日去電。
- (20) 「訳英領事復辜委員信」（未刊稿）。
- (21) 中国第一歴史檔案館蔵：光緒二十六年留中奏摺。
- (22) 『張之洞未刊電稿』庚子九月初五日去電。
- (23) 『張之洞未刊電稿』庚子閏八月十六日去電。
- (24) 『張之洞未刊電稿』庚子閏八月二十日去電。
- (25) 范文瀾『中国近代史』上編（第一冊），北京，人民出版社，1953年，338頁（訳者注）。
- (26) 同上，340頁（訳者注）。